



ウェルビーイングな日々

no 22

■ある展覧会のポスターに誘われて美術館を訪れた際、イヤホンガイドを利用しました。イヤホンから流れる俳優の語りは、作品の時代背景や制作の過程、作風の変遷などを丁寧にわかりやすく解説してくれました。まるで、絵画に詳しい友人が隣で話しているかのような親しみやすさがありました。さらに、BGMには作品にぴったりのクラシック音楽が使われており、最後にはその画家の作品からイメージし作曲された楽曲も流れるなど、観る者が作品の世界観にどっぷり浸れる体験を提供してくれました。

■また、歌舞伎でもイヤホンガイドのサービスがあります。舞台の進行に合わせて、あらすじや歌舞伎特有の約束事、登場人物たちの関係性や時代背景などが解説されます。解説者は自分で解説文を書き、役者のせりふと重ならないように注意して音声を録音し、さらに、稽古に足を運び、本番直前まで内容を細かく見直すそうです。このイヤホンガイドの個性あふれる語りは、舞台上の展開と絶妙に調和し、観客を一層深く作品の世界へと引き込んでくれます。最近では、タブレット型の表示機器を使用し、日本語や英語による字幕の提供も行われており、使用する言語の区別なく、また、視覚や聴覚に障がいのある方も含めて舞台芸術を楽しめる環境が整えられています。歌舞伎での、このイヤホンガイドのサービスは開始から50年もの歴史を持つそうです。

■今や、イヤホンガイドは芸術を楽しむための大切なツールになっており、その価値は「あると便利」というだけでなく、ユニバーサルデザイン(UD)の視点を取り入れたものへと進化しています。

■「必要とする人がいる」「あったらとても役立つ」と考え、「どうしたらよいか」を工夫しながら実践し、「皆で共有する」。この取り組みの流れは特別なことではなく、日常生活でも徐々に広がっています。子どもを取り巻く環境にもこのような考え方が浸透し、「当たり前」のものとして定着していくことで、誰もが暮らしやすい社会へと繋がっていくのではないのでしょうか。

